

九州臨床心理学会 第50回記念大分大会

ご案内(2号通信)

このたび、大分県で記念すべき第50回大会を開催させて頂くことになりました。まずは、皆様方と大分の地でお目にかかるのを楽しみにしています。大分県にきちよくれ！！

九州臨床心理学会が発足して、半世紀が経とうとしています。この間、本学会では、心理臨床の実践を磨くべく、事例検討を大切に扱って、多くの心理実践家のホームと呼べる集まりといえるでしょう。今回も、その伝統を引き継ぎまして、事例研究のセッションを多く取り入れたプログラムになっております。ぜひ、若手やベテランを問わず、困った事例、サジェスチョンがほしい事例などふるって発表して頂ければ幸いです。2日目には、事例検討に主眼を置いたシンポジウムを組みまして、事例研究の今後やSVのあり方などを議論できればと考えています。さらに、50年という節目をむかえるにあたって、九州臨床心理学会の過去、現在、未来についての鼎談を用意しました。私は、50年前に鹿児島で生まれました。その頃に鹿児島の霧島や指宿で九州臨床心理学会の前進である研修会が開催されました。私は参加できませんでしたが、その頃の臨床家たちの熱意を鴨池地区で感じていたような・・・(笑)。日本の臨床を牽引してきたなどを振り返り、100回大会へのキックオフになればと考えています。

最後に、満足度の高い懇親会を用意しました。コロナが落ち着き、参加者と夜もディスカッションできればと考えています。私の最大のミッションは、懇親会で参加者に気分良くしてもらおうことです。

スタッフ一同で、最大級のおもてなしをお約束します。ご参集のほど、よろしく願います。

九州臨床心理学会第50回記念大分大会実行委員会
大会長 矢島 潤平(別府大学)

1.日程 2023年2月11～12日(土曜・日曜) 2日間

2.会場 大分 コンパルホール 3階 (<http://www.compallhall.jp/>)
〒870-0021 大分県大分市府内町1丁目5番38号

3.スケジュール

2/11(土) *第1号通信から時間帯の変更に変更あり

9:15～ 受付	9:45～11:15 事例研究①	11:30～12:30 基調講演	12:30～14:00 総会・昼休み	14:00～15:30 事例検討②	15:40～17:40 自主シンポジウム	18:30～ 懇親会 (受付)
-------------	---------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	-------------------------	-----------------------

2/12(日) *第1号通信から終了時間に変更あり

9:00～ 受付	9:30～12:00 大会シンポジウム
-------------	------------------------

基調講演【鼎談】

演 者：野島 一彦（九州大学名誉教授）
児島 達美（Kojima Psycho-Consultation Labo.）
司 会：矢島 潤平（大会長/別府大学）
内 容：学会の50年の振り返りと今後へのメッセージ

大会シンポジウム 【事例検討を礎とした心理臨床を問う】

話題提供者：井村 修（奈良大学社会学部教授）
シンポジスト：平安 良次（医療法人へいあん発達相談クリニックそえ〜）【沖縄】
徳永 剛志（福岡刑務所）【佐賀】
姫島源太郎（福岡県臨床心理士会会長/災害対策担当理事）【福岡】
柳田 哲宏（宮崎カウンセリングセンター）【宮崎】
司 会：高橋 幸市（心理支援オフィス緑蔭舎）
加藤真樹子（副大会長/大分県厚生連鶴見病院）

内 容

心理臨床の実践活動を振り返り、学びを新たにする素材として事例検討または事例研究の充実は極めて重要である。事例をめぐるあり方は心理臨床のアイデンティティにも通じている。本シンポジウムでは事例という生の臨床素材から学ぶ意義や、さまざまな事例検討の場やあり方について、芯に迫る討論を行うことを目指している。特にコロナ禍にあって、対面による対話が困難な現状を踏まえ、具体的な工夫やこれからの事例検討やSVを含む在り方についても取り上げてゆきたい。多様な領域や立場から、地域での取り組みや現状や課題について話し合う機会としたい。

4. 事例研究及び自主シンポジウム

事例研究①の部

事例研究 A

題 名：がんで妻を亡くした男性のグリーフの過程を振り返る

発表者：白石 恵子（独立行政法人国立病院機構 九州がんセンター）

内 容：

妻の見取りの際にも夫が悲しみに暮れており、関係スタッフはこの先のことを気にしていた。妻を看取ったのち、気持ちの落ち込みや食欲低下、不眠などが続き、当科外来受診となった。

40代の時に妻は乳がんになり、そこから夫との関係は変化していった。20年に渡る闘病の中での夫はいくつもの喪失に立ち向かっていた。覚悟はあったものの妻が実際にいない現状を目の当たりにし、どのように今後過ごしていいのかわからない状態になっていた。

悲嘆の過程を振り返り、面談の中で何が起きていたのか、そして心理士として何ができたのか考えていく。

事例研究 B

題名：見立てに「惑い続ける」ことの意味 ―壮年期後期女性との面接を題材に考える―

発表者：高松 真理(自営)

内容：

精神科あるいは心理的支援の現場ではこれまで、様々な概念が言わば「流行り」を迎えてきている。一方「過剰診断」の問題が示す如く、どうやら臨床家は“耳に馴染んできた”単一概念による症例理解に傾きがちであり、結果その枠組みに対象者を強引に組み入れ、誤った介入を選択する危険性を背負っている。

今回報告するのは、経過とともに錯綜する見立てが立ち現れ、ためにセラピストが介入に惑い続けているケースAである。Aの「統合的視点の持ちづらさ」について、①いわゆるASD傾向ととらえ、「考え方を共に考える」ことを主体とした介入を行うべきか、②抑圧という防衛機制によるものと考え、力動的な理解を共有していくことが面接の展開につながるのか、都度思いを揺らされながら2年半が経過した。

当日はAについての見立ての検討と共に、「多角的視点の中で惑い続けること」の意味についてディスカッションをご一緒いただければと考える。

事例研究 C

題名：精神的不安定を訴える女子大生との面接 ―「自由」をめぐる―

発表者：細川 佳博 (心理臨床相談室りんごの木)

内容：

来談時、大学3年生の女子学生。精神的不安定さから自室に閉じこもり、そのことを心配した母親からの勧めで面接が開始される。中学、高校時代に、教員との折り合いの悪さから、不登校を経験していた。入院歴もあり、一時的にはかなり大変だった時期もあったとのこと。大学入学後、しばらくは安定したようだったが、再び状態が悪化していく。本人としても、中学、高校時代の体験に整理をつけないとならないと感じており、2週間に1回のペースでの面接の中で、教員との関係、母親との関係について振り返りながら、「自由」ということを考えていく。精神面は次第に安定していき、やがて夢の中で、不登校当時に自分に出会うという体験をする。そのような中、大学のゼミの研修に参加することになり、そこで出会った別室登校の生徒と関わる中で、改めて自分自身の「自由」ということを実感として体験していくことになる。そして、ご自身の意思で面接を終了していった。

事例研究 D

題名：発達特性と家族葛藤を抱えるAさんの事例 ―創作活動及び作品理解を通じた繋がり模索

発表者：分藤 未紀 (医療法人慈愛会 向井病院)

内容：

【クライアント】Aさん(23歳 女性)。B県より大学進学と同時に一人暮らし開始。就職活動における困りの背景に発達特性が伺え、両親への葛藤、抑うつ・不眠なども見られたため服薬及び発達特性のアセスメント希望にてX-1年、学生サポートルームの紹介にて初診。

【臨床像】色白でふくよか、長い黒髪は癖毛で、抜毛により頭頂部の頭皮が薄く見える状態。爪噛みや腕に自傷痕あり、視線はぼぼ合わない。精確な言葉遣いと単調なトーンで語られる。

【主訴】「両親への思いを整理したい」との希望あり、査定と並行して心理面接開始。

アセスメント結果を受け特性及び今後の方針に両親の理解と協力を得たが、却って葛藤と希死念慮は強まった。心理面接では、直接的に語られる思いだけでなく、Aさんの創作物や名言ノートから繋がりを模索した。本事例では、特にAさんの創作活動や作品に関する語りから、Aさんの思いへ理解を深め、今後の支援を検討したい。

事例研究②の部

事例研究 E

題名:SCの配置換えに伴う学校環境への戸惑いと働きかけ ～学校という場でSCができること～

発表者:川上 聡子(大分県教育センター)

内容:

筆者は大学院卒業後、SCとして高校(単独)に4年間、小学校(単独)に3年間継続勤務していた。今年度、県下SCの大幅な配置換えに伴い、筆者もこれまで担当していた学校から遠く離れ、初めての地域での中学校とその校区内の小学校4校を担当することとなった。

これまでの体験や経験をもとに、新しい中学校・小学校へ臨むも、地域性や校種の違いに困惑した。小学校ではSCを最大限に活用してもらえる状況である一方、中学校では時間的規則など含む環境面や校内の雰囲気にも難しさを感じた。この中学校内におけるSCのイメージがどのようなものであるのか、また、教育相談部の中でSCという役割を活かしてもらうにはどうしたらよいかということが課題となった。

今年度当初から2学期にかけて、筆者はSCとしてできることを模索してきた。また、この中学校にとって今後SCを有効に活用してもらうために、SCの課題・学校の課題を見つめ直したい。

事例研究 F

題名:摂食障害の症状を呈する女性との心理面接経過

発表者:信國 知恵(医療法人社団堀川会堀川病院)

内容:

患者は、精神科単科の当院を受診した20代前半の女性である。主症状は摂食障害で、関連し愛着の問題が浮かび上がった。初回来院時「不安にならずにすむようになりたい」を主訴に、主治医指示で週1回50分、対面法(全66回)で心理面接が始まった。患者は情緒的に抱えられる体験が極端に少ない事を語りながら、母親の大変さに目を向けていった。症状は酷くなり入院。現実の母親との関係を見直す動きが出てきた。その時に筆者の産休を伝えた。退院後、複数の男性と関係を持つ事について考えるようになった。また、当院リワークを利用し始め、リワーク担当の心理士と心理面接担当の筆者がこの患者に関わる事になった。筆者は安心感をもったが、患者とは音信不通になった。1カ月後、再入院し心理面接が再開。死にたい気持ちを訴える患者の心理面接の引継ぐ事になった。この約1年の心理面接の中で、筆者は患者の現実が改善しない状況を聴くのが苦痛だった。苦痛を感じながらも面接を重ねた事が患者にどのような影響を与えたのかについて考察したい。

事例研究 G

題名:触法障害者に対する社会内処遇における心理的支援～農福連携における一事例

発表者:三角 健(一般社団法人 STEP UP)

内容:

犯罪白書(令和3年版)を見ると、刑務所入所受刑者人員のうち、再入者の人員は、平成11年から毎年増加した後、18年をピークにその後は減少傾向にあり、令和2年は9,640人である。再入者率は、平成16年から28年まで毎年上昇し続け、その後おおむね横ばいで推移しており、令和2年は58.0%と依然として高い。その原因として触法障害者に「居場所」と「出番」がないことがあげられる。

少年院や刑務所を出所した人で、帰る場所がない方たちが一定期間過ごせる場所として、「更生保護施設」及び「自立準備ホーム」があり、当事業所でもこれまで複数名の方を支援している。

今回の事例は、幼少期に家庭から離別し、児童養護施設、児童自立支援施設(旧教護院)、少年院、刑務所(4回)と、これまで社会内での生活はごく短期間しかない。この方に対する心理的支援も含む当事業所の取組について発表させていただきたい。

自主シンポジウムの部

自主シンポジウム A	
題名	：これからの学校臨床を考える ～資格を超えたSCの横の連携を足がかりに～
企画者	：西山 和孝（大分県スクールカウンセラー） 米倉ゆかり（大分県スクールカウンセラー） 渡邊 晴美（大分県スクールカウンセラー） 小野貴美子（大分県スクールカウンセラー）
シンポジスト	：佐藤百合子（大分県スクールカウンセラー・学校心理士） 吉野 昭子（大分県スクールカウンセラー・学校カウンセラー） 高橋 泰夫（大分県スクールカウンセラー・臨床心理士） 中野 早紀（大分県スクールカウンセラー・臨床心理士）
指定討論者	：窪田 由紀（九州産業大学）
趣旨	： <p>これまで大分県では、スクールカウンセラーとして勤務している者の多くが 臨床心理士資格を保有していたため、大分県臨床心理士会のバックアップのもと 研修などが行われ、質の担保や向上が図られてきた。</p> <p>昨今、大分県においては臨床心理士資格保有率が低下し、新たに公認心理師資格が 資格要件に加わったことにより、より一層様々な資格を持った方々が勤務するようになった。資格の種類や有無に関わらず、スクールカウンセラーとして児童生徒の学校生活に寄与するためには 県内等しく一定水準のスクールカウンセリングが提供されていなければならない。</p> <p>SCの常勤化が検討される今だからこそ、学校臨床に携わる者がスクールカウンセリングの原点に立ち返り、それぞれの立場から今やるべきことを考えることが求められているのではないかと。今回は、資格の垣根を越えたスクールカウンセラー同士の横の連携という視点から、今後の大分における新しいスクールカウンセリング活動の展開を考える第一歩としたい。</p>

自主シンポジウム B	
題名	：コロナ禍における遠隔相談の試みを再考する～発展と課題～
企画者	：北吉 直子（社会福祉法人農協共済別府リハビリテーションセンター）
シンポジスト	：矢永由里子（西南学院大学・福岡市精神保健福祉センター） 麻生 健二（佐藤病院） 楳所 亮博（由布市役所）
趣旨	： <p>コロナ禍で、人との接触やストレス発散の機会が激減し、経済的に危機に陥る人やストレス疾患、自殺に至るケースも増加し、心理面接の需要が一段と高まった。しかし、同時に感染防止やクラスター発生などにより対面の面接が出来ない状況も生じた。そのような環境の中「遠隔相談」が発展していった。</p> <p>大分県におけるSNS相談の取組み、精神科における遠隔相談の試み、福岡県における新型コロナウイルス感染症の専門メンタルケア（電話相談）の取組みを通して、「遠隔相談」の取組み過程、実際の利点と問題点を共有し、今後の「遠隔相談」について発展と課題を考えたい。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 大分県におけるSNS相談について2. 精神科における遠隔相談の試み3. 福岡県における「新型コロナウイルス感染症の専門メンタルケア」の実際（電話相談）4. ディスカッション

5. 参加費

会員：4,000円 非会員：5,000円 学生(大学院生)：2,000円

- ※ 非会員および学生は、臨床心理関連業務に携わるか関連学科に所属し、守秘義務を遵守できる方に限定させていただきます
- ※ 本大会は日本臨床心理士資格認定協会の教育研修機会としての承認学術団体として認定されておりますので、臨床心理士資格更新ポイントの取得が出来ます。
- ※ 会費の徴収に関しては、イベントシステムを利用します。

6. 懇親会

参加費：一般 3,000円 学生 1,000円

会場：大分センチュリーホテル『桜の間』 <https://oita-centuryhotel.com/>

〒870-0021 大分県大分市府内町 1-4-28

- ※ 懇親会参加費の徴収に関しては、イベントシステムを利用します。

7. 支払方法

参加申し込み及び参加費(懇親会費含む)は、下記の URL もしくは QR コードよりお願いいたします。

- ※ 参加申し込みはお一人ずつお願いします。
- ※ 懇親会に参加される方は、懇親会も一緒にお申し込みください。



<イベントペイの URL>

イベント申込 | 九州臨床心理学会 第50回記念大分大会 (eventpay.jp)

https://eventpay.jp/event_info/?shop_code=5921130688110291&EventCode=P531614252

〆切：2023年1月22日(日)まで

8. 大会に関するお問い合わせ (事務局)

九州臨床心理学会第50回記念大分大会実行委員会事務局

住所：〒870-0023

大分市長浜1丁目7-3 サンライズ長浜 401

大分県公認心理師協会事務局宛

E-mail：kyurinshin50@oita-cp.com

大会 HP： <https://kyushurinsho-shinri.jimdofree.com/>